

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
502	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Genetic and environmental predictors, endogenous hormones and growth factors, and risk of estrogen receptor-positive breast cancer in Japanese women. 遺伝・環境予測因子、内因性ホルモンや成長因子と日本女性におけるエストロゲン受容体陽性乳癌リスク	
執筆者	
Yoshimoto N, Nishiyama T, Toyama T, Takahashi S, Shiraki N, Sugiura H, Endo Y, Iwasa M, Fujii Y, Yamashita H.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Cancer Sci. 2011;102):2065-72.	
キーワード	
乳がん、発がん性バイオアッセイ、プロラクチン、プロラクチン受容体	
要旨	
目的： 日本人女性の乳がんの発生率は過去20年間を通し全年齢層で倍増している。最近のこの著しい増加は主にエストロゲン受容体 (ER) 陽性のサブタイプの増加によるものであることが示されている。ER陽性乳癌のリスク予測が可能となる危険因子を確立することが必要であり、それによって予防療法の効率的な候補選択が可能になる。	
方法： われわれは遺伝因子(14つの一塩基多型 (SNP) )および環境危険因子 (BMI、初潮年齢、妊娠、初産年齢、授乳、乳がんの家族歴、閉経年齢、ホルモン補充療法の使用、アルコール摂取、喫煙)、血清ホルモン、成長因子 (エストラジオール、テストステロン、プロラクチン、インスリン様成長因子1 [IGF1]、IGF結合蛋白3 [IGFBP3]) を解析するとともに、乳がん女性913人およびその対照の278人にマンモグラフィの結果を解析した。重要な危険因子を同定するために、閉経前、閉経後女性におけるER陽性乳癌に関するリスク予測モデルをロジスティック回帰分析により作成した。	
結果と考察： 閉経前の女性では1つのSNP (CYP19A1-rs10046)、年齢、妊娠、授乳、アルコール摂取、プロラクチンの血中濃度、テストステロンおよびIGFBP3がリスク予測因子となった。閉経後女性では、1つのSNP (rs1042522-TP53)、年齢、体格指数、閉経年齢、テストステロンの血清レベル、IGF1がリスク予測因子と同定された。危険因子は閉経の有無によって異なる可能性があり、環境因子に加えて共通の遺伝的変異と血清ホルモン測定値を含めることで、危険因子評価モデルが改善した。更なる妥当性研究が予防的治療にふさわしいリスクグループを明らかにするであろう。	